

大君再論

—その状況と思惟—

武原弘

はじめに

薫の愛を峻拒し、聖潔への意志を貫徹して逝いた大君の死を描く「総角」巻は、宇治十帖前半部のクライマックスであると同時に、愛の苦悩に充たされた一平安朝貴族女性の「女の一生」の完結を思わしめる、重いひびきをもつ巻である。それは、畢竟、大君物語の完結に他ならないのであるが、ここで語られる結婚拒否の思想が、「橋姫」巻に始発し、「椎本」巻を経過し来た大君の全生涯の究極の到達であったことは、大君論を企てる際、要諦として、たえず再確認される必要があるだろう。彼女の結婚拒否の倫理が、自律的観念の思惟の所産であったと説かれるのは不当でないとして、そうした観念や思惟が真空の彼方から突如飛来したものでなく、大君をとりまく現実の具体的状況において、またそれとの切実な、主体的関わりの中から模索され、獲得された当のものであったことを想起すべきなのである。その意味において、「橋姫」「椎本」「総角」の三巻を通観し、それを「大君物語」として構造的、統一的に把握する視座こそが要請されてくるのである。

大君再論 —その状況と思惟—

以下、それら三巻を通して、大君をめぐる状況の推移展開に即しながら、彼女における思惟の深化過程を追求し、考察を加えたい。

一、二組の恋人たち

「橋姫」巻の冒頭文「その頃、世にかずまへられ給はぬふる宮おはしけり」(四—297)が、これから新たな物語の始発することを告げる、古代物語としての定型法にかなった叙述であることは、つとに諸先学の指摘したところであるが、それが都離れた宇治を舞台とする、いわゆる「姉妹物語」である点に、まず留意しておきたい。都を捨て、世を遁れて隠棲する俗聖八宮の美しい姫君たち。それを偶然垣間見た都の貴公子薫の惑乱が、この「姉妹物語」の端緒をなす。

「姉妹物語」の話型として、すでに伊勢物語一段や大和物語一四二段などにその先蹤を見ることができ、源氏物語の正篇では類型を見ることはできず、続篇冒頭部のいわゆる匂宮三帖中の「紅梅」「竹河」両巻では試みられたものの進展せず、この巻に至ってはじめて構想を新たにしている本格的展開を見せることになったものなの

である。

物語はここで、菊田茂男氏の指摘するよう⁽⁸⁾、大君―薫―中君という三角関係の人物構図による恋物語を展開するかに見える。が、奇妙にも考えられるのは、この物語ははやい段階で匂宮の登場を許しており、四人二組の男女による恋物語への発展の兆候を見せている点である。三田村雅子氏によれば、「男主人公二人に対置する二人の姉妹という平行四辺形的な構図はそれ自体静的であつて、四者それぞれの関係と心の動きを追うのはよいとしても、筋書を進行させるような動因には乏しい」のである。しかしながら、氏がさらに論及して、「平行四辺型の一角が欠けることは物語の進行上必然で」「大君の結婚拒否とその究極としての死は平行四辺形の安定をうち破るためのものとして恐らく始めから予想されていた」とするならば、「総角」巻までの大君をめぐる物語は、後続の中君をめぐる物語のための単なる伏線でしかなく、大君造型に託した作者の重い主題を過小評価することにもなつて、私には賛同できない。氏の言う平行四辺型の人物構図を、いま々大君物語の基本構造と見なして、そこにこそこの物語に固有な主題と方法を探ることはできないであろうかと、私は考える。

物語が、はやくから姉妹の性格を注意深く描き分けている点が、まず示唆的である。

ひめ君は、らうらうじく、深く、おもりにか見え給ふ。わか君は、おほどかに、らうたげなるさまして、物づゝみしたるけはひ、いと、うつくしう、(下略) (橋姫 四―301)

思慮深く、おちついていて重々しい大君と、可憐な愛らしさが魅力

の中君である。晩秋の月下の霧に透かして薫が垣間見た姉妹は、

さしのぞきたる顔、いみじく、らうたげに、匂ひやかなるべし。そひ臥したる人は、琴の上にかたぶきかゝりて、(中略) うち笑ひたるけはひ、いま少しおもりに、よしづきたり。

(同 四―314)

と描かれて、その動作や表情にそれぞれの個性が認められる。

このように、対照的とも言える姉妹それぞれの性格の相違は、先んずる「匂宮」巻に「匂ふ兵部卿、薫の中將」(四―27)と並び称せられて性格も対照的に描かれた薫と匂宮に、おそらく対応させたものなのであろう。垣間見の直後に、薫が姫君たちに挨拶を申し出る場面が描かれている。御簾を隔てて応待するのは、本文にそれと明示はないものの、大君であることがわかる。これ以後、両者の対応関係は自明のものとして物語に常態となるのが興味深い。他方、匂宮が宇治を舞台に本格的な活躍を見せるのは、「権本」巻以降であるが、巻頭部にある初瀬詣途次の中宿りの折、宮ははじめて姫君たちに歌を贈る。姉妹いずれにと特定した詠出ではなかったが、その返歌の筆を執るのが中君で、以後の両者の関係を暗示する伏線描写とも解することができる。すなわち、以降に展開する恋物語における人物対位についての作者のひそかな用意なのである。もちろん、「橋姫」巻の段階でそうした人物の構図はあらわな形を見せはしない。物語の展開にあわせて、それを徐々に状況化する作者の精妙な方法にこそ、いつその注意が必要なのではあろう。

ところで、それぞれ対照的な二組の男女の恋物語は、頭初から、主題においても恋とは背反矛盾するところのもうひとつの契機を内

在させている。それはまず求道者として登場する薫に集中的に顕現し、匂宮や中君を連動させながら、大君に収斂していく過程を通して、二組の恋人たちが形づくると二つの愛の内実を検証するものなのである。

弁の御許の問わず語りで、不義の子として生まれた己れの宿命についての証言を聞かされた薫は、深い衝撃を受けた。宇治の山霧に胸塞がれ、行き交う川舟に世の無常を觸する底知れないペシミズムが、沛然と彼を襲う。

薫は大君に贈歌する。

橋姫の心をくみて高瀬さす棹のしづくに袖ぞぬれぬる

(橋姫 四—322)

山里に閉じ込められて生きたる姫君の胸中を思いやつての詠出も、いまは薫自身の鬱憤の屈折した表白の歌としかならない。ここで薫に属目の自然は、彼の寂しい心象風景でありつつ、同時に大君自身のそれでもある。

さしかへる宇治の河長朝夕のしづくや袖を朽し果つらむ

(同 四—323)

大君も返歌し、深い孤独と無常感を共有する二人に、しみじみとした唱和がなりたつ。いま相呼応する若い二つの魂が、世間にある色恋の世界とは無縁の存在として、厭世求道の思いに深く交感しあっているのである。

ところで、暗澹たる思いで帰京した薫は、さっそく匂宮に姫君たちのことを話し、宮を煽動する。薫の心理は解き難いものとせざるをえないが、「聞え励まして、御心騒がしたてまつらむ」(橋姫

大君再論 — その状況と思惟 —

四—325)との叙述は、身分上匂宮が浮いた宇治通いなど許されえないことを見通した薫の、単純な悪戯心を意味するのであろう。好色心に勝る匂宮は「いと、せちにをかし」(同)と強い執着を示し、かくして、やがて「見ではやまじ」(椎本 四—345)と熱中することになる彼の宇治への道程が、ここで用意されたことになる。薫の宇治通いが、色恋に無縁の仏道修業のためのものであることを聞かされる匂宮は、「おどろ／＼しき聖言葉。見はしてしがな」(橋姫 四—327)と笑う。求道者と好色者という、全く異質で対照的な薫と匂宮が、いま同じ宇治に通うそれぞれの道を歩み出そうとして向かいあっている。両者は、互いに対者を得ることによってそれぞれの道程を確認し、必然化し、正当化していくことになるだろう。

ここに登場する匂宮は、薫の求道心をいっそう深化させる契機であり、またそれに揺さぶりをかけてその内実を検証する媒体でもある。そうした状況をもたらす条件として、匂宮もまたこの物語に必然の存在であることは言うまでもない。

「橋姫」巻末で、薫は柏木の遺品の文反故を手渡された。その証拠の品によって親の不義の事実を確認した薫は、大朝雄二氏の説くように、「罪の子の自覚により恋の道に能動的になりえない決定的な幽止め」⁽⁴⁾をかけられたわけでもあろうが、留意すべきは、この時以来、薫は「すぎ給ひにけむいにしへさまの思ひやうるゝに、つみ軽くなり給ふばかり、行ひもせまはしくなむ」(椎本 四—346)との思念を強くし、八宮や大君との深交をいっそう必然的とする状況が確定されたという点である。つまり、薫の出生の秘密にかかわる弁の問わず語りは、宇治へ通う薫の道程を強化し、むしろ彼を烈し

く宇治へ放ち遣る契機でもあったのである。

こうして物語は、都から宇治へ通うその同じ道を、全く対照的な二人の青年貴公子に踏み分けさせる用意を整え、彼らを迎えるに同じく対照的な性格の姉妹をもつてした。本来、宇治というところは、そうした異なる要因の共存を可能にする歴史的、文学的伝統に支えられている地理的空間なのである。さらに、清水好子氏の説くごとく、宇治十帖の物語が基本的に「二者対照の方法」に拠るものであることも、ここであわせて想起されるのである。

二、八宮の死

「椎本」巻に入っても、薫—大君、匂宮—中君の恋愛構図が決定的に明確化されているわけではない。それはなお、未然の可能態の物語として進展しつづけると評すべきであるが、その対照的な二組の恋人たちによる愛の探求がこれからはじまるといういまの段階で、そのなりゆきを司る視点人物は八宮である。

死期の近いことを予感した八宮は、かねてからの本意を遂げるべく、山寺参籠を決意する。が、心配なのは、姫君たちの将来であった。見譲るべき人もなく、信頼して姫君たちの後見を依頼できるのは、薫一人である。

なからむ後、この君たちを、さるべき、物のたよりにもとぶらひ、思ひ捨てぬ物に、かすまへ給へ。(椎本 四—346)

宮のこのような依頼に対し、薫も行く末変らぬ志を約束するのである。

一言にても、うけたまはりおきてしかば、さらに、思ひ給へお

こたるまじくなん。(中略) めぐらひ侍らむ限りは、「かはらぬ心ざしを、御覧じ知らせむ」となむ、思ひ給ふる。(同)

ここで、いささか細部にこだわりたい。宮は「君たち」の後見を依頼している。後見は結婚の意を含むので、宮の依頼が具体的にどういう内容の意味するかに注意したい。八宮自身の思量するところは、「一」どころ、世にすみつき給ふすがあらば、それを見ゆづる方に「(同—345)」というものであったとなっている。薫が姉妹のうちのいずれかと結婚したあと、それを縁故として残る一人の娘の世話もまかせよう、というほどの意であろう。宮の依頼が、これほど具体性を帯びて薫に語られることはなかったのであるが、やがて後に、薫が大君に結婚を迫りつつ、他方において匂宮と中君の結婚の仲介に努めるというのが、生前の八宮との默契ともいふべき右の趣意の忠実にして誠実な履行であることが理解されるのである。そのような薫が大君に拒絶されなければならなかった事由については、後述にまちたい。

八宮はまた、入山に先だつて、姫君たちに対しても厳しい訓戒を施す。その要点の部分についてのみ、本文を引く。

過ぎ給ひにし、御おもてぶせに、軽／＼しき心ども、つかひ給ふな。おほろげのよすがならで、人の言にうち靡き、この山里をあこがれ給ふな。たゞ、「かう、人に違ひたる、契り、異なる身」と、おぼして、「こゝに、世を尽くさむ」と、思ひとり給へ。(椎本 四—350)

すでに論じ尽くされているが、この訓戒はやがて遺戒となり、父なき後の姉妹の生き方を強く呪縛することになる。大君の結婚拒否の

倫理確立も、その根拠をなしたのはこの遺戒であると考えられている。

近時、大朝雄二氏が「父宮の遺言があったから大君は薫の求愛を拒否した、というが如くには短絡できない」として、「大君自身の意志で」「遺言を解釈し直して最も狭い意味に自己限定した」所以のものを、「父宮の訓戒がまさに遺言となった」ときの大君における「状況」から解析しているのは、示唆に富んでいる。八宮の死のときから、大君は「宮家の主として」、また「中君のただ一人の後見者として」の重い責任を自覚する。彼女の薫拒否が、こうした責任遂行の謂でもあったことは確実である。この問題については、「総角」巻の物語を中心に、次節でさらに詳考したい。

それにしても、「椎本」巻の物語が、頭初からはやばやに八宮の他界を用意する点に、私は留意しておきたい。前の薫に対する八宮の依頼、姫君たちへの訓戒、また女房たちに与えた訓告など、それらはすでに遺言たるべき文脈の裡におかれている。続く場面では、やくも訪れる八宮の死、姫君たちの悲歎が描かれ、物語ははい時間経過とともに、弔問のためにする薫の頻繁な宇治通いの場面を累積していく。匂宮も、文を送って姫君たちを慰め、心を通わせる。そして、たび重なる薫と大君の対話場面が、聖俗の間を揺れ動きながら深まりゆく二人の愛の遠い行程を形なしていくかのごとくである。

すなわち、八宮の死は、薫と匂宮の宇治への道程を急速に締め、必然化し、孤立して寄るべない姉妹たちに二人を急迫せしめる新たな状況の導因となっている。後見者を失って自主自律の生を歩みはじめねばならない姫君たちに、都での桎梏から逃がれて思い思いに

自我を解き放とうとする二人の青年が肉迫する。宇治という閉じられた空間で、純粹な精神としての主体的自我に発する思惟と行動のみが有効で可能な四人によって、それぞれに対照的な愛の試行がはじめられようとしているのであるが、こういう意味においても、八宮のはやい死が物語に必然であったと考えることができるだろう。

八宮の訓戒は、その要点の(一)として、親の面目をつぶすな(家名を汚すな)(二)としてよく立派な男性以外とは結婚するな(山里で独身を通せ)という内容のもので、姫君たちの結婚に関わるこのような制約も、薫一人は例外とするものであったことは、大君にも中君にも十分了解されていた。「故宮も『さやうなる御心ばあらば』と、折／＼の給ひ、思すめかりしかど」(総角 四—394—395)という叙述によっても、大君は薫との結婚を許されていたことがわかる。八宮の死後、四十九日の忌明けも待たない薫の弔問、以後にも絶えない彼の慰問は、文を通わせるのみで自らはなかなか訪ねて来ない匂宮とは対照的で、誠実にして献身的な薫の人柄を身近に大君が確認する機会でもあった。八宮の厳しい訓戒は、むしろその例外規定としての薫の誠実な人格を逆照射するものであり、宮のはやい死は、大君において、薫との結婚による宮の訓戒成就への一階梯として物語に必須であったと解釈することもできるのである。

このように見れば、物語における状況は、いま確実に薫と大君の結婚へ向けて進行しているかに見える。

三、大君の愛

「総角」巻に入って、物語はにわかに高まる薫の求愛と、それを

拒否する大君の内面心理とを克明に描写しはじめ。そして、大君の思惟過程が、結婚拒否へ向けていかにも直截分明に見えながら、むしろ微妙な動揺と自己葛藤をはらみつつ深化していった点が注目されるのである。

身分地位において、人柄において、「定めなき世の物語を、へだてなく聞え」（四一三〇）合う人生觀において、とりわけ故八宮の遺言を守る同志として、薫は大君にふさわしい結婚相手であった。が、物語を辿って知らされることは、まさにその薫の理想性の故にこそ、大君は薫を拒絶するのである。この逆説が、大君自身の主体的選択であったことは確實として、その選択がなぜ、いかなる状況のなかで行われているかが考察されなければならない。

大君が薫を拒絶するいくつかの理由のなかで、私に最も重要と考えられるのは、薫の愛を妹中君に向けさせ、二人を結婚させたいとする大君の思量である。

少し世ごもりたる程にて、深山隠れには、心苦しく見え給ふ人の御うへを、「いと、かく、朽木にはなし果てずもがな」と、

（下略）（総角 四一三三）

いま、引用は一例にとどめるが、物語本文に右のような妹中君の幸福な結婚を願う大君の心情は、くり返して強調される。前節でも触れたように、八宮の死後、大君には自らを家父長の立場においてもつ自覚と責任が大きかった。自身の結婚は、後見者をもたない身として、ありうべからざるものと思ひ捨て、中君の後見者となつて世話をする責任が、大君にはあつた。「いまは、見護る人もなくて、親心にかしづきたて、見聞え給ふ」（同一三九）大君である。

物語をさかのぼると、「橋姫」巻頭に近い条に、八宮の北の方が中君を産んで急逝する場面がある。北の方の遺言として、

たゞ、この君をば、形見に見給ひて、あはれとおぼせ。（橋姫

四一三〇）

とあつたその一言を、八宮は片ときも忘れることはなかつた。

「いまは」と見えしめで、「あはれ」と思ひて、うしろめたげに、のたまひしを」と、おぼし出でつゝ、この君をしも、いと、かなしうしたてまつり給ふ。（同一三九）

幼い妹娘の方により深い心配りをするのは、母親を失つた姉妹の養育に当る父親八宮の自然な情とも言えようが、この叙述に注目して、八宮の中君に対する愛情は格別であつたと解釈することも許されよう。

前にも触れた「椎本」巻での八宮の訓戒は、本文にも「君だちにも」（四一三〇）とあつて、姉妹二人に対して施されたものであることは言うまでもないが、八宮にとってその将来が心配だつたのは、大君以上に中君だつたと考えることができる。また、「総角」巻で大君が再び想起する父宮の遺戒

世の中を、かく、心細くて過ぐし果つとも、中く、人笑へに、かるくしき心つかふな。（四一三九）

が、同様に姉妹二人に与えられた厳しい結婚倫理であつたのは確かとして、そのころすでに、匂宮との仲を近めつあつた中君に対して、この訓戒はより重くびくものであつたろう。

中君が大君に答えて、

一所をのみやは、「さて、世に果て給へ」とは、きこえ給ひけ

ん。はか／＼しくもあらぬ、身の後めたきは、教添ひたるやうにこそ、思されためりしか。(同)

というその言葉によつても、そのことが証されているとしたい。物語の作者は、このようにはやくから、匂宮との愛をめぐつて曲折を辿るであろう中君の運命を中心的な主題において、巧妙な構想のもとにそれを展開させてきていることがわかる。中君は、いわば潜在としてのもう一人の主人公であり、大君はまさにその後見者であり同伴者なのである。

徐々に迫り来つたある好色者匂宮とかかわつて不安にみちた中君の行く末を案じながら、八宮は他界した。父宮の代役をつとめる大君が、中君の将来に抱いたそのような不安や危惧の念をそのままひき継ぐのは、当然であつたと言ふべきなのかも知れない。薫の仲介が積極化して、中君の前途にいまやはつきりと見える女の不幸を、大君はいかにして阻止することができるか。「我よりは、さま・かたちもさかりに、あたらしげなる中の宮」(総角 四―35)に幸福な結婚を後見てやるのが、父宮の遺志を全うする道であることを認識した大君の思量とは、中君を匂宮に許さず、薫と結婚させ、自らは独身を遁そうというものであつた。

とは言え、理想の恋人として思慕する薫を中君に譲ることが、大君にとって内心に苦痛なきを得るものではない。

みづからの上のもてなしは、又、誰かは見あつかはん。この人の御さま、なのめに、うち紛れたる程ならば、かく見馴れぬる年頃のしるしに、うちゆるぶ心も、ありぬべきを。恥づかしげに、見えにくき気色を、中／＼、いみじくつゝましきに、わが

世は、かく過ぐし果てむ。(同―35)

右の叙述では、言葉の表層の意味とはうらはらに、その深層において、大君の薫への思慕の情とそれを自ら振り払おうとする激しい自己葛藤が表現されているのである。薫への愛と中君への責任とのジレンマに思い乱れる大君なのである。

私は、このような大君像における悲劇的形象性を重視したい。後に見る大君の病臥と死が、彼女の悲劇の頂点なのではあるが、愛するにもかかわらず、愛する故にこそ薫を拒絶し続けた大君の内界の悲劇こそが、大君物語の主題性を担っているからである。

四、大君の死

大君の意向にもかかわらず、薫の心が中君に移ることはなく、逆に薫のさかしらによつて、中君は遂に匂宮と契りを結ぶ結果となつてしまつた。薫との愛を犠牲にしてまで戦いもつてきた中君を匂宮に奪われ、大君は悲歎と絶望に涙する。すべてが徒勞に終つたのである。これが「宿世」というものだ、と薫に慰められても、大君には「目にも見えぬ事にて、いかにも／＼、思ひたどられず。知らぬ涙のみ、霧りふたがる心ちしてなん」(総角 四―45)との歎きの言葉しか返せない。

大君は、当初から、匂宮の好色を忌避してきた。宮からの文が折頻る頃、父宮から「いと、すき給へる親王なれば、(中略)直もあらぬすきびなめり」(椎本 四―34)と教えられ、大君は「かやうのこと、たはぶれにも、もて離れ給へる、御心深さ」(同)を自ら育んでいったものらしい。父親譲りともいふべき大君のそうした性

情は、一方で、匂宮とは対照的な薫の誠実を見ることによって、相対的にますます強固なものとなつていったのであろう。「総角」巻で、大君が薫を拒絶するのも、彼が執心のあまりに示す好色の態度への彼女の嫌悪の表明であつて、薫の人格そのものの拒否ではなかつたことに留意すべきであらう。

おほかたにては、有りがたくあはれなる、人の御心なれば、こよなくも、もてなしがたくて、対面したまふ。(総角 四一388)

との叙述によつても、そのことは確認される。大君の薫に対する信頼と思慕は変わらず、中君と結婚した匂宮が予想通りの不実を見せるとき、大君はそれに薫の態度をひきくらべ、

心ばへの、のどかに、物深く物し給ふを、「げに、人は、かくはおはせざりけり」と、見あはせ給ふに、「有りがたし」と思ひ知らる。(同一431)

と薫を慕うのである。

しかしながら、家父長代行者として中君と薫の結婚を実現するための後見に専念してきた大君は、匂宮と中君が契りを結んだその日から、自らの使命と生きがいを失つたのである。それは、物語世界における大君の役割の終止をも意味する。

匂宮の夜離れを嘆く中君を眼前にして、大君は結婚による女の不幸を現実に見た。これまでの薫との愛を、そのように無惨な形に終わらせたくなひ。

「あはれ」と思ふ人の御心も、かならず「つらし」と思ひぬべきわざにこそあめれ。われも人も、見おとさず、心違はでやみにしがな。(総角 四一432)

その愛を尊く大切に思うからこそ、大君はいま、薫への訣別を思念しているのである。やがて彼女は病臥し、匂宮と六の君の結婚の噂を耳にするに至つて、重態に陥る。その病床に自ら臨んで、手をとつて看病する薫を、大君は拒まず

かゝるついでに、いかで亡せなむ。(中略) かう、おろかならず見ゆる心ばへの見劣りて、我も人も見えんが、心安からず、憂かるべきこと。もし、命、しひてとまらば、病にことつけて、かたちをば愛へてん。さてのみこそ、長き心をも、かたみに見つべきわざなれ。(同一459)

と、二人の愛の永遠不滅を念願するのである。そして、それはやがて、「物の枯れゆくやうにて、消え果て」(同一462)る彼女の死によつて成就されるのである。半身を都の世俗に残して、しばしば情念の嵐に揺さぶられながら迫り来た薫の愛を、大君は死によつて淨化し、聖化し、永遠化したのである。それは、雪降りしきる冬の日の、清く美しい死であつた。

かくて、大君における結婚拒否と死は、妹中君への自己犠牲的愛情に発し、薫との恋を聖愛として完成する主体的行為として、彼女自身によつて選びとられたものである。森一郎氏によると、「薫に対する大君の情念は決して『男性不信』などではないと思う。大君の『結婚拒否』はむしろ薫への慕情を秘めた愛のかたちであつた」とするが、けだし卓説であらう。そして、その愛がかたちなす初発から完成まで、匂宮の登場が物語に不可欠の条件であつたことを看過してはならない。その意味において、大君が拒否した当のものは、薫ではなく、徹頭徹尾、匂宮だつたと評してさしつかえないの

である。

大君が、中君の後見役をつとめながら、生きて薫との愛を全うする方途を、物語は模索しなかったのではない。かつて、恋情を抑えかねた薫が、屏風を押しあけて侵入し、大君の顔にかかる黒髪をかき払いながら切情を訴えたとき、大君は恐怖のあまり「いふかひなく憂し」（綵角 四―390）と泣いて拒絶した。薫も自重し、二人は夜一夜、「常なき世の御物語」「月をも花をも、おなじ心にもてあそび、はかなき世の有様を、きこえあはせて」（同―392）過ごした。二人が契りを結んだと見る女房たちの目をよそに、薫は大君に語っている。

例のように、なだらかに、もてなさせ給ひて、たゞ、世に違ひたることにて、今より後も、たゞ、かやうにしなさせ給ひてよ。「世に、うしろめたき心はあらじ」と思せ。（綵角四―393）すなわち、表面は世間一般の夫婦を装いながら、実際には潔白のまま（男女間の実事なく）親交を続けよう、というのである。これに対し、大君は賛同して答える。

今よりのちは、さればこそ、もてなし給はんまゝにあらん。

（同）

情欲を離れ、肉体の関係を超えて夫婦の愛を実現しようとする二人であるが、人間存在とその営みがそれほど単純浅薄なものではないことを熟知している作者は、それほど安易な解決を二人に与えはしない。以降の物語において、薫はさらに深く暗い情念の世界に引き戻され、大君はより奇酷な現実状況に置きなされる。作者はそのようにして、二人の愛のかたちと本質とを、極限まで追求し、試み

大君再論 ― その状況と思惟 ―

るのであるが、それが大君の死に至る悲劇の内実を形づくるものである点については既に述べた。

大君の「宿世」は、匂宮の好色によつてかき乱され、薫の情念によつて「霧りふたが」（四―415）れたと言つてよい。彼女の結婚拒否と死は、男性の好色に対する厳しい批判挑戦であり、同時にその完成のための生け贖だったのである。後々の物語における中君の幸福な結婚生活も、大君を犠牲としてはじめて可能であつたことを思うとき、作者の大君造型にかけた悲劇的主題の重さがいっそう強く会得されるのである。

註 (1) 三谷栄一氏「源氏物語における物語の型」（『源氏物語講

座』第一巻 有精堂所収）を参照。

(2) 菊田茂男氏「東屋・浮舟・蜻蛉・手習・夢浮橋」（『源氏物語講座』第四巻 有精堂所収）

(3) 三田村雅子氏「源氏物語第三部発端の構造」（『日本文学』昭50・11）

(4) 大朝雄二氏「薫と大君の物語―橋姫巻から椎本巻への展開―」（『文学』昭57・8）註(7)も同論文による。

(5) 高橋亨氏「宇治物語時空論」（『国語と国文学』昭49・12）

(6) 清水好子氏「世をうち山のをんなぎみ」（玉上琢弥編『源氏物語』角川書店所収）

(8) 森一郎氏「宇治の大君と中君」（『源氏物語作中人物論』笠間書院所収）

〔追記〕

大君については、既に拙論「大君とその物語世界」（『源氏物語論—人物と叙法—』所収）「大君の世界」（『源氏物語探究会編『源氏物語の探究』第二輯 風間書房所収）などを公表したが、なお再考し、本稿は、物語状況論を基盤とした人物論たるべく、新しい視座からの再論を試みたつもりである。